

身の回りから男性の数が減っていった。軍隊という別世界へ送るために、女達は列を作っては旗を振り、振りつづけた。わたくしの夫も送った。

しばらくすると、遺骨を迎えるための列をつくるようになった。防空訓練、防火訓練、救護訓練、毎日のように並んで行進をし、間には配給食糧の受取りに列をつくった。「供出」という名で結婚指輪から鉄瓶、蚊帳の吊手まで家の中の金属類を総ざらいし、爆薬にするとかいうふとんの綿も背負って運んだ。

日本の庶民が近代戦をたたかう用意も資格も持っていなかったとは、後になってから言えたこと。

とにかく東京の人口を減らそうという「疎開」という言葉が出て来た。学童はまとめて

地方へ分散させる。各戸は疎開先を決めて届けよ、と追い立てるように言われても行き場の無い者ばかり。現代ほど別荘を持つ者も、地方にアパートと呼ぶ建物もほとんど無い時代であった。

せめて着物の少々でも知り合いにあずけよう、と考えても、ふだん着でない物といえは紋服類である。取りまとめて送ったあと、ハタと気がついた。これで焼け出されたら毎日家中そろって五ッ紋に裾模様、男は黒羽二重の盛装で暮らすことになる。洗濯も紋付、田んぼの手伝いも紋付、「正気の沙汰じゃありませんよ」と母が言えば、父は「毎日裾模様で居てはいけなくて法律はないさ」と言い、結局は笑うほか無かった。

林美美子は早く長野県の志賀高原の麓へ

疎開し、時々東京にあらわれる。温泉のある所で「お手伝いさんが葎草を茹でながらへこのお湯どこで沸かしているのですか？」と聞くのよ」とか「鶏一羽持つてくれば、どこの家だつて泊めてくれるさ」などと言って私達を羨しがらせたが、それほど良い事ばかりだったかどうかはわからない。

東京では、十数軒の隣組に週二回の野菜配給が、大根二本に南瓜数欠けではどうにもならず、庭を掘り、道路のはしの土を起してみても、蒔く種が手に入らない。築地で、貝の紐の干物を買うと、と聞けば、大森洗足池の近くのわが家から電車を乗り継いで行つては列に並ぶ。蒲田で何かが、と耳にすれば其処へも行く。手間、ひま、電車賃を使って出かけても、すぐに売切りされて、買えるとは限らないのだが、家族が食べるためには出かけるしかない。運よく、昼頃の「雑炊」の列に入れば、家の一食がたすかる、という事になる。

政府か、東京の企画か知らないが、ほんの一期間、雑炊の提供があった。もちろん有料だけれど、例えば銀座では、松坂屋の七階で食べるためには、下の舗道から列になり、食べ終わった人の椅子の空くのを待ちながら一段ずつ時をかけて進んでゆき、やっと手にするこの出来る一碗であった。それも量に制限

風歌のあゝる 風景

⑤

齋藤 史



があつて、「今日はここまで」と打ち切られれば万事終り、黙つて帰るしかない。

それでも中央のものは良かった。五反田駅前のそれは、広場の空地に葦簀を立て廻し、わざと幾曲りもするような造りに出来ていて、一足摺りに進んでゆくと、何人もの人が何度も使つた割箸の水洗したものが濡れたまま置かれている。中の二本を握り、更に進んで、やっと受け取る雑炊は、どろりと溶けて鱧え

た臭いがしたが、それを言う者は無く、立つたままでする。軍隊か何かの残飯だとも聞えてきたが、ふしぎにお腹もこわさなかつた。陸軍病院に居た夫が、危篤状態になり、かろうじて助かつたもののそれで軍務を解かれることもなく、軍医の仕事が続け、帰宅を許されたのは昭和十九年。召集から六年がたった。更に肺炎を起し入院。看病に通う私は鉄兜を背に負つた。

目に見えて東京は追いつめられていった。

吉屋信子はとりあえず鎌倉へ移り、そこも駄目ならば軽井沢へ行くつもり。住んでいる神楽坂の家を居抜きでゆずりたい、と言つても引き受ける人が見つからない。知人が新しい総桐の箆筒、鏡台をただで手放します、といつても欲しがる者は居なかつた。地方へ運送の方法も無くなつてからの道具類は、焼けると覚悟した家の燃え草になるだけなのだ。

始めの頃は夜空に青い筋を揚げた照空燈(サーチライト)が、B29の機体を銀色に捉えて見せることもあつたが、それも消えた。弾丸が届かないまでも音を聞かせていた高射砲もはずまつてしまつた。昼夜なしに空襲のサイレンがひびき、夜はことに暗黒の町空の底の何処かが赤黒い炎の色を上げて燃えた。ひとたまりもなく東京は焼野原になり、火の中に人々は死んだ。

東京駅に立つと、向うに日本橋の三越の建物だけが見え、間に眼をささぎるものは何も無い焼跡。

*

これは「歌のある風景」などと呼べるものではない。

しかし、「人生の風景」にはちがいない。

わたくしはそれを眼の奥に刻んだ。「歌」は山や海の自然とか家族の風景の中だけにあるものではない。人生の風景や、心の内側の風景から掴み出し引き出すしかないのだと思つた。

赤黒く空にのぼれる火の下に死につつあるものが東京は

わが街を毀ちて爆弾の裂くる音ひびきは地より腹につたはる

落ちるごとく防空壕に入りて来て誰の名前か呼び立てにけり

わたくしは疎開することを決めた。子供たちを、「大人の時代」の下敷にすることは出来なかつた。

(さいとう・ふみ 「原型」主宰)

※このコーナーでは、齋藤史氏のエッセイと前登志夫氏のエッセイを交互に連載いたします。